

静岡県伊東市 (旧宇佐美村)

* 明るい色の海 原点に

4歳まで、両親の実家がある静岡県の宇佐美村で育ちました。小金井市に移ってから、小学生時代は毎年、夏休みは宇佐美で過ごしていました。

海岸に面した漁村で砂浜がともきれい。叔父が岩場でサザエを採ってくれました。つぼ焼きにして食べると、貝本来のうまみがあった。おもしろい。夏になるとホテルが群れるぐらいい飛ぶんです。薄ぼんやりとした街灯の明かりの境目をホテルが出たり入ったり。幻想的でマジックを見るような感じでした。

僕の原点の景色は、高台から一望した宇佐美の淡く明るい色の海です。でも、直木賞を受賞

した小説「黄色い牙」は秋田の狩人、マタギの話でした。保険調査員をしていた20歳代の時、聞き込みをした秋田の集落でマタギの男性と出会いました。山小屋に寝泊まりして猟をする話を聞き、海と山の生活の違いに驚きました。海には穏やかな母の、山には厳しい父のイメージを持ちました。

おやじは国鉄職員でした。僕が中学3年の時、北海道で新しい路線づくりの現場監督をしていました。ある日、仕留められたヒグマの前で猟銃を立て、あぐらをかくおやじの写真が家に届きました。牛や馬を襲つたので、地元の人がヒグマを退治したの

です。盆と暮れしか帰ってこず、寂しかったのですが、この写真を見てから、おやじを尊敬するようになりました。39歳の時、おやじががんて余命3か月と、医師から告げられました。ささげる作品を書こう

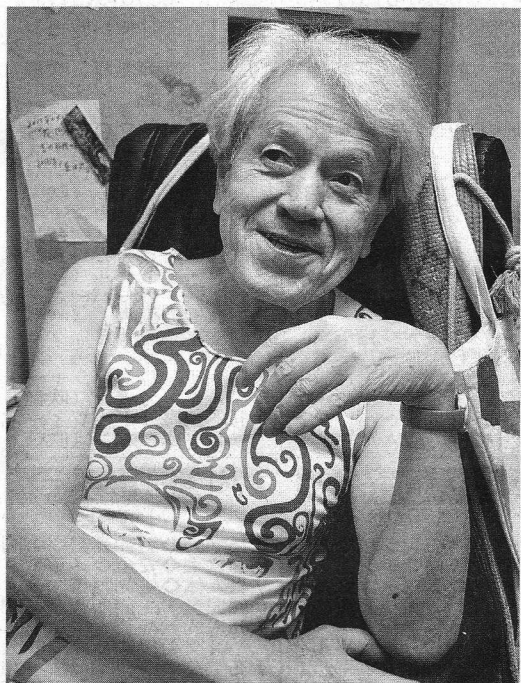
と。7月、完成すると、おやじは「良い本だ」と喜んでくれました。2週間後、息を引き取りました。宇佐美で育ったから、僕の中で海の明るさと深山の厳しさが結びついたと思います。宇佐美でなければ、黄色い牙は生まれていなかったかもしれないですね。

(聞き手・伊藤甲治郎)



作家

志茂田 景樹 さん 74



【思い出の1枚】絵本の読み聞かせ

58歳の時から全国の幼稚園や小学校などで絵本の読み聞かせ公演を続け、1700回を超えました。写真は



2004年、宇佐美で公演した時の様子です。

僕が書いた絵本「ぞうのこどもがみたゆめ」の親子のゾウが別れる場面では、何人かの小学生が涙を流していました。ふるさとの子供は感受性が豊かなんだと、誇らしく思いました。

読み聞かせの後、質問を受けました。僕の髪の色については、こう答えました。「真っ黒や白だけじゃつまらない。色合い豊かな方が、心も豊かで元気が出るんだよ」